

総合科学技術・イノベーション会議有識者議員懇談会 [公開議題]

議事概要

日 時 令和3年6月24日(木) 11:00 ~ 11:35

場 所 中央合同庁舎第8号館 6階623会議室

出席者 上山議員、梶田議員(We b)、梶原議員(We b)、小谷議員(We b)、
佐藤議員(We b)、橋本議員(We b)、藤井議員(We b)

(事務局)

別府内閣府審議官、赤石事務局長、柳統括官、佐藤事務局長補、
井上審議官、覺道審議官、高原審議官、千原審議官、清浦参事官、
植木参事官

(文部科学省)

塩見審議官、合田科学技術・学術総括官

(経済産業省)

浅野サービス政策課長 / 教育産業室長(We b)

議題 教育・人材育成について

議事概要

午前11時00分 開会

上山議員 では、総合科学技術・イノベーション会議有識者議員懇談会を開始します。

議題は、教育と人材育成についてです。

今日は文部科学省から、塩見大臣官房審議官と合田科学技術・学術総括官、経済産業省からは浅野大介サービス政策課長 / 教育産業室長に来ていただいております。

それでは、よろしく申し上げます。

植木参事官 前回木曜会合で梶田議員から、私どもがお示しをした国際調査の結果、小学校から中学校にかけての理数教育への関心が非常に低いというデータをお示したのに関連いたしまして、その理由について分析したものはないかという御下問がありましたのに対して、その場ではデータがなかったものですから、文部科学省にお願いをいたしまして、改めて整理をして今回審議官から御説明をいただくということになった次第です。

以上です。よろしくお願いいたします。

塩見審議官 失礼いたします、文部科学省の学習基盤審議官の塩見と申します。よろしくお願いいたします。

今お話しいただきました点について、少々お時間いただきまして御説明の方をさせていただきます。

資料として、お手元に理数教育の充実に向けてと題しましたペーパーをお配りさせていただいております。

まず、1ページ目めくっていただきまして、2ページ、右下に2ページとあるところから始めさせていただきたいと思いますが、まず、これは前回も御覧いただいたものですが、国際教育到達度評価学会が行っておりますTIMSSの結果についての資料です。下の方を御覧いただければお分かりのとおり、前回も話題になったところではありますが。日本は算数・数学、理科、これに関しまして得点は非常に高い訳なのですが、右下の方にございますように、それぞれが楽しいと答えた割合が、小学校、これ4年生、中学校、中2ですが、国際的に見て低い状況になっていると。日本は太線で書かれた部分はその数字になっておりまして、過去から比べると少し上がってはきているのですが、算数・数学については国際平均よりかなり低い。また、理科については、小学校段階では国際平均よりも楽しいと答える割合が高い訳なのですが、中学校になって大きく下がっているという実態がございます。

それを国際的に見るとどうかというふうにまとめましたのが3ページ以降です。まず、理科の小学校4年生についての、これ国際的な平均得点と、それから理科の勉強は楽しいと答えた児童の割合の分布を表したものであります。黒い枠で囲ってある部分、これが得点は平均よりも高く、かつ楽しいと答えた割合が平均よりも多いという国々になっております。小学校4年生の理科は日本も実はこの枠の中に当然あるという状況です。

次のページですが、これが中学校になるとどうか。中2の状況ですが、この枠の中にあるのはシンガポールあるいはトルコといったところになってまいりますが、日本は枠から外れて、左の方にございます。これ御覧いただきますと、ほかにも台湾ですとか韓国、得点が高いが、勉強が楽しいと答えた割合が少ないという国々がこうした形で分布しておりまして、どちらかといいますと全体として得点が高い国は楽しいと答えた割合が少ないという状況にもある訳ですが。一方でシンガポールのような国もあるというところ です。

その次は5ページ、これは算数について、小4の状況です。これは枠で囲った中に日本は入っていないということで、得点は高いが、楽しい割合が少ない。

また、その次のページ、駆け足ですみません。中2の数学ですが、日本はここでも得点は高いが、楽しいと答えた割合が少ないという状況になってきております。

その次に7ページですが、こちらはOECDのPISAの結果を基に少し分析をしたものがあります。PISA2015で、科学的リテラシーを中心として調査いたしましたときのを基に書かせていただいておりますが、縦軸の方が科学の楽しさ指標、楽しいとそれぞれ生徒が感じているかどうか。右の方が、探究を基にした理科の授業に関する認識指標ということで、学校の授業で探究的な学びが取り入れられているかどうかについての生徒の認識を尋ねたもの、これをこのような形で示しておりますが。日本は楽しいという部分についても低く、また探究を基にした授業の認識という点でも低いということになっております。探究を基にした授業が行われているという割合が高いほどどちらかという科学が楽しいと思っている割合が全体としては高くなる傾向があり、特にカナダ辺りではそれが顕著に見られるというところです。

次のページを御覧いただければと思います。今出てまいりましたシンガポールあるいはカナダといった国々の教育課程がそれがどういう特徴を持っているのかという点について、必ずしも十分ではありませんが、我々として把握できた範囲で簡単にまとめさせていただいたものがこちらです。

シンガポールやカナダの理科教育におきましては、総じて日常生活や社会との関連づけ、また探究的な活動を重視するということが特徴になっているということが言えると考えております。

また、下の方に表でも出てまいりますが、TIMSS2019の中学校の理科で勉強が楽しいと回答した割合が高かった国、シンガポールやトルコにおきましては、専攻分野が教育と自然科学または理科である小学校の教員の指導を受けている小学校4年生の割合が57%、52%ということで、5割を超えているという状況にありまして。こうした国々では小学校の教師の専攻が自然科学である割合が日本と比べて高いということが言えるのではないかと見ております。

それから、9ページです。こちらは文部科学省が行っております全国学力・学習状況調査を基にした調査研究ということで、平成24年度に理科についてこの調査を行った際の分析ですが。理科の勉強が好きと答えている回答への影響の強さというものを分析しましたところ、理科がよく分かるというのが最も大きい訳ですが、次いで、観察や実験が好きという値が大きくなってまいりました。また、理科の勉強が大切と回答した回答への影響について見ますと、よく分かるとともに、理科の授業で学習したことを普段の生活で活用できないか考えるという割合

が高いということが分かっております。

ですので、この研究におきましては、理科が分からない、理科の実験・体験が少ない、理科の授業で学習したことを普段の生活と関連づけられないということが中学校における理科の関心・意欲の低下の主要な原因なのではないかと指摘しております。

こうした現状を踏まえて、今取り組んでいることについて何点か簡単に御説明いたします。10ページです。理数教育の充実に向けた取組という点です。ここでは便宜上理科を中心に御説明いたしますが、算数・数学についてもほぼ同様の考え方で取り組んでいると御理解いただければと思います。

まず、学習指導要領の改善という点ですが、上の方の枠にございますとおり、今まで見てまいりました子供たちの理科の好きあるいは楽しいといった状況が低いという状況を改善するために、生徒自身が観察・実験を中心とした探究の過程をしっかりと体験するということが大事であること。あるいは理科の面白さを感じたり理科の有用性を認識するということが大事であるということが改訂の前提となりました中教審答申でも指摘されております。

また、観察・実験等を重視して学習を行う教科である理科がこのSTEAM教育の中核となって探究的な学習の充実を図っていくことが大事だということも述べられております。

これを踏まえまして、平成29年3月に改訂されました学習指導要領におきましては、理科について小学校、中学校ともにこれまで以上に科学的に探究する学習活動を充実するということとありますとか、あるいは関心を高める、また有用性を実感させるといった観点から、日常生活や社会との関連を重視するということを強調しております。また、観察・実験の充実を図るということも強く打ち出されております。

学習指導要領の解説というものも文部科学省で作っておりますが、その解説の中で色々具体的な例も挙げながら、こうした日常生活や社会との関連を意識させるような指導を進めようということを求めているところであります。

また、教科書の記載例について、11ページに少し事例を掲載しております。特に中学校では抽象的な概念がたくさん出てきましたり、専門的な用語も多くなるということで、理科の学習を中々そう好きになれない子供たちが増えていくという面もあると思いますが、是非身近なところから興味・関心を引き出して、探究する力を育てようという工夫としまして、ここにございますような、これはある教科書の例ですが、色々な物質とその性質というところで、謎の物質Xの正体を色々な探究過程を経て見いだそうとか。あるいは力による現象について学ぶ中で、巨大な石像がどのようにして運ばれたのかといったようなことを探究しながら学ぼうとか、

様々な事例も見せながら今改善を図っているところです。

また、12ページですが、こうした取組を支えていくための環境整備としまして、理科の教育設備、観察・実験等に使う設備についての補助金、これを令和3年度におきましては17億円出させていただいており。また、観察・実験のアシスタントのための補助の経費もこのような形で計上しているところです。

13ページには、ここでは科学技術人材育成支援ということですが、JSTとも連携しながら、裾野からトップ人材の育成まで、こうした理科を好きで、理科については是非学んでいきたいという子供たちを増やす取組を進めております。

それから、すみません、14ページです。理数の教育を進めていく中でも、特にやはり教員の力というものが大事になってくる訳ですが、今中央教育審議会の方で教師の養成・採用・研修の在り方について総合的に検討を行っておりますが、その中でも14ページの中ほどの右の方でございます、多様な専門性を有する質の高い教師集団ということで、優れた人材確保の在り方、また強みを伸ばす育成キャリアパス、更に下ののところまいて、学校外で勤務してきた方々の経歴や専門的な知識、技能をいかに評価して免許を付与していくかといった点について、検討が行われております。理科や数学の優れた知識技能を有する人、情熱を持っている人にいかに学校教育に参画いただくかという点も含め検討を進めることが大事だろうと考えております。

それから、最後です。15ページですが、今年の最新の中教審の答申の中でも、ここにありますような特定分野に特異な才能のある児童生徒に対する指導の充実、これは文部科学省でも有識者会議を設置して検討を始めるということになっておりますが、こうした観点。また、小学校高学年からの教科担任制の導入。また、ここは高等学校についての記載であります、これは全ての学校種について言えることだと思っておりますが、一つの学校で全てを完結するという自前主義から脱却して、学校内外の教育資源を最大限活用していくということ。また、STEAM教育等の教科等横断的な学習の推進ということが盛り込まれているところでしてm これらを指針としながら、更に取組を進めてまいりたいと思っております。

特にGIGAスクール構想によりまして一人一台端末というものの環境も整ってきたことでもございまして、外部と様々な形で子供たちがつながっていくチャンスが大きく広がってきていると思います。是非多くの関係者の皆様の御協力を得ながら、こうした理数の面白さ、意義を実感しながら子供たちが知的好奇心を伸ばし、創造性を高めていけるような学びの環境づくりを進めていきたいと考えております。

御説明以上です。

上山議員 ありがとうございます。

それでは、ここから質疑の応答に入りたいと思います。どなたでもお手をお挙げください。では、梶田議員、どうぞよろしくをお願いします。

梶田議員 まず、御説明どうもありがとうございました。今の御説明をお聞きしまして、ある程度中学で急に理科が好きではないという人が増えるという理由も分かったような気がします。どうもありがとうございました。

今の御説明をお聞きしまして、やはり教師の力が非常に重要だということが、14ページに書かれていたかと思いますが、正にそのようなことが分かったと思います。

それで、今日のメインのポイントではないのですが、せっかくの機会なので、1点だけ発言させていただければと思います。というのは、2週間前のこの会合で、女性研究者の問題が議論されました。その際に、理科教育と女性研究者、あるいは広く女性の理工系の活躍は切り離せないと皆さん多くの方が言っていたかと思います。今後の理科教育を考える際に、女性あるいは女子という観点は非常に重要かと思っておりますが、今回の資料を見ますと、女子という言葉が12ページの1か所、女子高校生の理系進路選択支援プログラムにしか出て来ないということに少し気がなつたところです。

具体的な点で、14ページで教師の在り方が書かれておりますが、この点については是非今後、理科の女性教員、特に中学、高校の女性教員を増やすということを御検討いただければと思っております。

以上です。今日はどうもありがとうございました。

上山議員 ありがとうございます。

では、今の御質問に対して、何かお答えいただければ。

塩見審議官 ありがとうございます。御指摘のとおりでありまして、女性教員、特に理数系の分野で女性教員に更に活躍いただくという環境づくりとても大事だと思っております。今中教審で先ほど申し上げましたように、養成・採用・研修の在り方総合的に検討しておりますが、その中でも是非そういった視点も踏まえるべきだと考えておりますし。

また、学校教育の中でも、文理を分けて文系、理系というふうな形で教育するのではなくて、その文理を融合させてということ、これからの非常に大事なテーマだと考えておりますので、地道な取組も含めて、今後御指摘踏まえて取り組ませていただきたいと思いますと考えております。

梶田議員 よろしくをお願いします。

井上審議官 すみません、内閣府の井上です。

実は先日の女性の関係の話で、裾野の拡大というのがものすごく課題として認識されたと思ってまして、その後、実は今後教育・人材育成についてもC S T Iで深掘りしていくということになっていますが、その中で実はこの女性研究者の裾野の拡大というところと密接に関わりますので、その深掘りの中で、正に今梶田先生おっしゃっていただいたようなことで取り上げるということで、少し事務的には検討しております。

上山議員 では、続きまして、佐藤議員、どうぞよろしくお願いいたします。

佐藤議員 ありがとうございます。今日の御説明も非常によく分かりやすく、ありがとうございました。

私から2点ほど申し上げたいと思います。先ほども議論になっておりますように、教師のレベルあるいは量といったものが整わなければ、このS T A E M教育は絵に描いた餅になってしまうということは皆さんの御認識どおりなのですが、教師を育成、研修することに加え、D Xの時代ですから、デジタルを使ってこの一つの壁を乗り越えるということも検討に値するのではないかと考えています。具体的には、遠隔教育の仕組みをこの中に取り入れることによって、レベルの高い教員あるいは教師が物理的に離れていても、その教育に当たれることができるという仕組みを作っていくことが、このソリューションの一つになるだろうと思います。

ただ、その場合には、教師を支える環境整備という記載もありますが、過重労働の問題や処遇の問題というものを同時並行的に考えていく必要があります。D Xを使うにしても、一人の時間は限られていますので、それを手伝ってくれる人にどのようなメリットがあるのかも含めて全体的な教師の処遇改善を一つのテーマとして取り上げていかない限り、育成や研修にどれぐらい時間が掛かるのか、どれぐらいの効果があるのか、極めてクエスチョンだと私は思っています。今ある知を利用するためにはデジタル、これをどう使うのかということを含めて考える必要があるだろうと思います。それが1点目です。

それから、2点目は、幼児教育から大学教育までの一貫した教育環境の中でS T A E M教育の持続的評価が可能になってくるとことは多分正しいだろうと考えています。その点について、例えばお茶の水女子大学などは、幼稚園から大学院まで運営しています。そうした大学の教育にS T A E M教育あるいは総合知みたいなことも含めて、ある程度特化して任せるといったやり方もないのかなと考えています。それが答えではないにしても、この幼児教育から大学教育までの一貫したS T A E M教育の持続的な強化といったものについて、もう少しアイデアを出していくべきだろうと感じています。

以上2点です。ありがとうございました。

上山議員 ありがとうございました。

小谷議員のお話を聞いてから文部科学省に振ります。

小谷議員 どうもありがとうございます。

数学に関してですが、数学の楽しさはずっと分からないところが続いて、いきなり分かるころにあると思います。

一方で、小中高では受験ということが目の前にあるために、そこを待つ根気が中々難しく、取りあえず覚えるという形にある時点から教育がシフトしていて、そのことが数学の能力の高さと楽しさがどちらかという逆相関につながっている原因のようです。数学の抽象的なハードルを越えることは少人数教育でやればかなり解決することは分かっているのですが、ただ、少人数教育はリソース的なことがこれまでは難しかったです。先ほど佐藤議員が言われたようなデジタル化は本当に大きな手掛かりになると以前から思っていました。これまでの小中高の環境、ICT環境が良くなく、そうしたことができなかったので、GIGAスクール構想の中に、そのような優れたプログラムが入っていくような、そうした取組が非常に重要だと思っています。

上山議員 ありがとうございます。

橋本議員、どうぞ。

橋本議員 私も今日のお話を伺って、学習指導要領の改訂などでかなりこうした分析を基に進められているので、それで良い方向に行くのだろうと、検証はこれからなのかもしれませんが、それは十分期待するとして。やはりとても大きいのは、我々として関わっていくべきは、今御意見のあった教員の方のことなのだと思うのですね。それで、もうおっしゃっていたとおりなのですが、教師を支える環境整備の話と、これ正にこれは非常にとても重要なことであるし、それからもう一つ私感じているのは、やはり専門性を、ここに書いている ですかね、14ページの に書いてある、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の在り方と、これが今の教育系大学、教育系学部の在り方で中々難しいという話もここで出てきている訳で。そのようなことがある程度出て来た、どこで議論するのか、そうしたことを共通認識した上で私質問なのですが、これ政策に落とし込まないといけませんよね。文部科学省はもちろん政策に落とし込もうという努力をする訳ですが、CSTIにここに持ってきたということは、もう少し違った立場で政策に落とし込むということだと思うのですね。そうすると、政策に落とし込むためには、これを具体的なものに落としていって、どうやってそれを実現するかという戦略、戦術

を考えないといけないのですが、それは今後どのように進めていくということなのでしょうか。お答えいただければと思います。

上山議員 ほかの方も手が挙がりましたので、そちら先にいきます。藤井議員と梶原議員ですね。では、藤井議員、どうぞ。

藤井議員

御説明ありがとうございました。今日の話も前半は理数教育という括りでの議論が進んでいる訳ですが、日常あるいは社会との関連を重視する文脈の中では、理数に閉じない考え方をしていくことが重要だろうと考えております。理数の中だけの議論になってしまうと、広く子供たちの関心を高めるといった方向に持って行くのは難しいのではないかと考えております。

最後のところでSTEAM教育ということもキーワードとして入っていて、先ほど塩見審議官も教科等横断的ということをおっしゃっていましたので、是非理数に閉じずに文理をまたがる形での議論をしていただくのがいいかと思っております。これが1点です。

また、日常や社会との関連を重視する中で、それから教員の皆さんの働き方そのものが問われている中では、学校外の方々がどう関わっていくかを考えていく必要があります。高等教育機関、地域、社会等というのが最後の15ページにございますが、もっと言えば、産業界や、科学技術に携わっている人々も含めて、こうしたことに関わっていく可能性を開くといった議論をしていただけるとよいのではないかと思いますので、是非よろしく願いいたします。

上山議員 続いて、梶原議員、どうぞ。

梶原議員 ありがとうございます。

御説明ありがとうございました。1ページのグラフを見て、明らかに楽しくなるという比率が伸びているということは評価するべきだと思えました。国際標準から比べるとまだ至っていないという表現をされるのですが、平成24年度の結果でこうしたことが重要だと分かってきたという意味でいうと、24年以降、現場の先生たちが腐心してきちんと動いているから、2ページのように明らかに好きだという子たちが増えてきているということであり、現場の取組として評価していいのではないかと思います。

その上で、教師の資質という話がありましたが、企業では人を育てるためにメンターを付けることがあります。先ほどDXの話がありましたが、場所も時間も問わずにつなぐことができるので、そういったネットワークを充実して、先生方が困ったときにお互いに相談し合ったり、相談する相手がいるといった環境の整備も視野に入れるべきだと思います。

そのメンターやネットワークの中に産業界も加わり、産業と社会との関わりを伝えていくこ

とも重要だと思えます。弊社でも出前授業を行っていますが、子供たちからよく聞かれることは、その人たちが子供時代にどんな状態だったかということです。算数や理科が好きだったよという人もいれば、好きではなかったけれども今はこういう仕事をしている、ということを知ること、子供たちが身近な親や先生とは違う社会人と接し、新たな気づきを得たり、新しく知ることがあります。そうした社会人とのつながりを、ネットワークや出前授業をうまく使っていくなど、包括的に見ていくとよいと思えます。

上山議員 ありがとうございます。

一応色々な御意見が出ましたが、教師の人材育成の問題、それから外の人を使うDXの問題、それから政策をどう具体的にしていくのかということ、それから理数学にとどまるべきではないと、こんな議論がありました。どなたでも結構ですが。では、植木参事官。

植木参事官 恐縮です。よろしいでしょうか。

実はこの後の議題として上げさせていただいておりますワーキンググループの設置についての中で御案内をしようと考えておったのですが、このSTEAM教育等について議論をするワーキンググループの中で、その検討事項について、これまでも何度か木曜会合の場で御議論を賜りましたのを踏まえまして、後ほど申し上げますが、大きく三つの柱で検討いただこうと思っておる中に、今先生方から御指摘がありましたような指導体制や教育内容の充実等を図るためのSTEAM教育の具体的な方策について検討事項として掲げております。

それから、博士号取得者、若手研究者、それから企業の人材等、そういった高度の理系人材を学校外から学校に派遣をして、そういった先端技術等に触れる機会を創出する、そういった具体的なスキームの在り方がありますとか。あるいはSTEAM教育に関連する様々な人材、STEAMの人材でありますとか、学校、自治体の関係者、そういった方々のネットワークの構築の在り方も一つの大きな要素として考えておるところです。

それから、これは藤井先生からありましたとおり、理数教育に特化するだけではなくてということについても、今回STEAM教育推進のためにはまずはその基盤となる各教科、理数にかかわらず、その各教科等における探究的な学習活動の充実が不可欠であるということを前提とした上で、こうした、繰返しになりますが、義務教育段階の理数教育について、指導体制や教育内容の充実等について具体的な方策について御検討を賜ることとしておりますので、このワーキンググループの中で今先生方から御指摘がありましたことを更に深掘りをして、検討を進めさせていただければと考えております。

以上です。

上山議員 ありがとうございます。

ほかにはいかがですか。恐らくまた次のクローズのところでのワーキングの話になると思いますが、具体的な政策づくりについて、これからどうしていくのかという話になると思います。

今日は大変詳しい情報をいただいて、分析もいただいたのですが、例えば今日も少し出ましたが、一貫的な教育で実態どういようなうまくいっている事例があるのかとか。例えばアメリカなど、イギリスもそうですが、ボーディングスクールみたいなのがあって、そうした意味では本当にエリート教育をやっている、それがリベラルアーツ型の大学につながって行って、大学院ではハーバード、スタンフォードとそうしたところに行くという、ある種のキャリア形成があるのですが。我が国の場合はそうした多様性はあまりなくて、きちんと文部科学省が管理しているという方向だと思うのですが。そうしたことの海外の事例等も含めた、ギフテッド・チャイルドからどう育てていき、それを社会のエリートに育てていくかみたいな道筋も含めて、どんな政策形成があるのかということは関心を持っているので、またお話をさせていただきたいと思います。

いかがですか、ほかに。合田総括官、何かあります。

合田総括官 本日はありがとうございました。

今上山議員がおっしゃっていただいたことは全くそのとおりで。先ほど塩見からも御紹介申し上げました1月の中教審答申でもいわゆるギフテッドの子供たちに関する提言も頂いたところであり、このいわゆるギフテッドの子供たちというのは、様々な困難さに向かい合っている子供たちとの結構重なりがございますので、そういったことをよく見た上で実証研究に取り組みさせていただきたいと思っております。

なお、先ほど藤井議員から教科横断という話がございましたが、このSTEAM教育の振興充実というのは、決して文部科学省だけでできるものではございません。府省横断でやっていかなければならないことだと思っております。特に、抽象的に思考できるとか、論理的に思考できるという、DXの時代に求められる考え方というのは理数を核としながら全ての教科に関わる。特に探究的な学びに関わることだと。これは藤井総長に御指導いただいているところですが。そのことについて是非研究現場と学校というのをどう結ぶかということは引き続き取り組ませていただきたいと思いますし。

かねて、佐藤審議官からも御指摘をいただきましたが、私ども教育のリソースを確保する上でも、財務省との間ではバイでは決して勝てませんので、是非CSTIの御支援をいただきながら、STEAM教育という大きな文脈の中で子供たちのために取り組ませていただきたいと思います。

思っておりますので、引き続きどうぞよろしくお願いいたします。

上山議員 ありがとうございます。

もしここでその他の御質問や御意見がなければ、公開の部分はこれで閉じさせていただいて、次の。ありますか。

植木参事官 一つ。恐縮です。先ほど橋本議員から政策への落とし込みについて御下問ありました。それについてですが、これもこの後のワーキンググループの設置の際にも御案内申し上げようと思っていたのですが、このワーキンググループで一定の方向性について可能であれば年内にお取りまとめをいただいて、そのお取りまとめいただいた内容については、その後の例えば統合イノベーション戦略推進会議等の政府の各種会議でありますとか、あるいは統合イノベーション戦略2022や骨太方針、成長戦略の中に適宜盛り込んでいくことによって政策への落とし込みというのを適宜進めていきたいと考えております。

以上です。

上山議員 ありがとうございます。

では早速ここで公開の議題は閉じさせていただいて。ワーキングのところの話に移りたいと思います。またそこで詳しい御説明をいただければと思います。

塩見審議官と合田総括官、どうもありがとうございました。

午前11時35分 閉会